

テーマ「地元で働き、地元で暮らしたい！という夢の実現に向けて」

～飛び込もう地域へ！育もう地域と！～

大分県立南石垣支援学校 進路指導主任 栗野 長

Keyword：体験の機会、希望進路の達成、チャレンジ

I 目的

1. はじめに

本校は令和3年度より、「飛び込もう地域へ！育もう地域と！」というキャッチフレーズを掲げて、小・中・高等部ともに地域住民との交流活動や地域資源を活用した学習を計画実施し、“地域と協働した子ども達の育成”を推進している。この取組の一環として令和4年度から『働く力や社会性』の育成、『障害者雇用の理解、啓発』に力を入れるため、中学部のジョブチャレンジの充実（実習場所の開拓、回数の増加）、高等部の地元の一般企業での産業現場等における実習推進を図ることに取り組んでいる。

※ジョブチャレンジとは本校中学部における産業現場等における実習の呼称

II 取組の背景

上記を推進する中で見えてきた実態や課題があった。

①地域の一般企業での実施率の低さ→令和元年度から3年度まで3年間20%前後であった（図1）、②一般企業への就職率の低迷（表1）→①が大きく関連していると思われる。

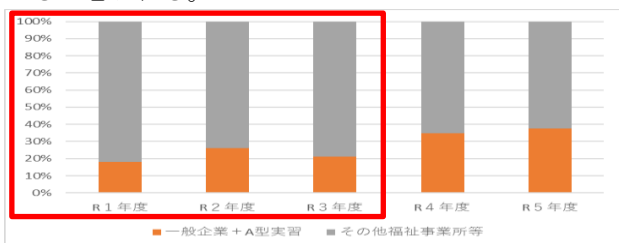


図1 一般企業(就労継続支援A型含む)活用率の推移

表1 高等部卒業生の進路状況の概要(過去5年分)

卒業年度	一般就職	就労継続支援A型	その他福祉就労等	一般就職率
平成30年	4	2	17	26.1%
令和元年	1	1	22	8.3%
令和2年	2	1	11	23.1%
令和3年	2	2	11	26.7%
令和4年	2	1	10	23.1%

※全国平均（約34%）、「大分県長期教育計画の目標：令和6年33%」

要因は様々あると考えられるが、①教員が現場実習先の候補を検討する際に生徒が失敗しないように選定するケース、②体験の機会（産業現場等における実習※以下、現場実習）が少ない（特に令和2～4年度については新型コロナウイルスの影響もあった）、③実習や進路指導に関する引継ぎが不十分、以上3点が大きな要因であるのではないかと考えた。

こうした背景から、『地域の一般企業等での実習機会を増やすことで、地域の一般企業等への就労率を向上させ、「地元で働き、地元で暮らしたい！」という夢を実現させる』について、3か年計画で取り組み検証していくこととした。

III 対象学年について

令和4年度入学生（本年度高等部2年生）は、職業生活科12名、生活教養科2名の計14名が在籍している。男女の構成は男子11名、女子3名である。また、2年次から14名中6名が職業コースに在籍しており、高等部卒業後の一般企業等への就職を目標として教育課程を編成し、学習に取り組んでいる。

※本校における職業コースとは、広く一般就労に必要とされる力を身に付けるカリキュラムを通して学習し、一般就労を目指すコース

令和5年度入学生（本年度高等部1年生）は、職業生活科12名、生活教養科4名の計16名が在籍している。男女の構成比は男子13名、女子3名である。

以下表2に高等部の入学生と所有する療育手帳をまとめた。所有する療育手帳から知的障がいの大まかな実態を捉えた。ここ数年は療育手帳B2（軽度知的障がい）保有者の割合が35%以上で推移している。しかし、図1や表1にも示しているように一般企業の実習や卒業後の就労には結び付いていないのが現状である。

表2 高等部入学生と所有する療育手帳

入学年度 (卒業年度)	高等部 生徒数	療育手帳			
		B2 (軽度)	B1 (中等度)	A2 (重度)	A1 (最重度)
平成28年 (平成30年)	23	11	9	2	1
平成29年 (令和元年)	24	10	5	8	1
平成30年 (令和2年)	14	5	5	3	1
令和元年 (令和3年)	15	7	6	2	0
令和2年 (令和4年)	13	5	3	2	3
令和3年 (令和5年度)	19	13	2	2	1
令和4年 (令和6年)	14	8	1	2	2
令和5年 (令和7年)	16	6	2	5	1

※療育手帳取得見込みの生徒も在籍しているため生徒数と保有者の合計が一致しない

※太い枠線内が対象生徒

Ⅳ 取組の実際

1. 主な取組の計画については以下のようにした。

表3 進路指導3か年計画(主な取組)

1年目	2年目(本年度)	3年目
現場実習先選定の見直し改善(情報共有・長期的な視点での計画)		
●各種会議で視点の再確認・周知徹底 ●校内進路指導委員会の見直し ●引継ぎ資料の見直し ●教育課程の再検討及び実施	●校内進路指導委員会の計画・運営 ●進路指導及び実習の記録運用状況の確認 ●新教育課程の実施及び状況の確認	

2. 具体的な取組

上記の3か年計画を踏まえ、具体的には以下の取組を行った。①各種会議(学部会、学年会、分掌部会など)での周知、②校内進路指導委員会の適切な運営、③進路に関する記録(引継ぎ資料)の新様式作成、以上3点について見直しを行った。校内進路指導委員会については、年間4回計画・実施し、進路状況の確認だけでなく、現場実習先の選定について管理職からも意見を積極的にもらうようにし、チーム学校として希望進路の達成に向けて取り組むようにした。引継ぎ資料については、次年度への引継ぎの目的だけでなく、高等部3年間を見通した進路指導の計画を立て、指導を実施できるものにした。現場実習先の検討についても進路に関する記録を活用し、現在の生徒の実態だけではなく、卒業までにどのように課題解決をしていくかに視点を置き、検討するようにした。また、教員(担任)が一般企業での実習先を検討しやすくするために、実習受入企業データベースの見直しを行った。

教育課程については以下のように再検討した。

表4 産業現場等における実習に係る教育課程

学部・学年	変更前	変更後
中学部1年生	3学期: 校内5日間	1学期: 校内5日間 3学期: 校内5日間
中学部2年生	1学期: 校内5日間 2学期: 校外2日間 3学期: 校内5日間	1学期: 校内5日間 3学期: 校内3日間 校外2日間
中学部3年生	1学期: 校内5日間 2学期: 校外2日間	1学期: 校外2日間 3学期: 校外2日間
中学部総日数	校内実習: 20日間 校外実習: 4日間 合 計: 24日間	校内実習: 18日間 校外実習: 6日間 合 計: 24日間
高等部1年生	1学期: 校内5日間 2学期: 校外10日間	1学期: 校内5日間 2学期: 校外7日間 3学期: 校外8日間
高等部2年生	1学期: 校外10日間 3学期: 校外10日間	1学期: 校外10日間 3学期: 校外10日間
高等部3年生	1学期: 校外10日間 2学期: 校外10日間	1学期: 校外10日間 2学期: 校外10日間
高等部総日数	校内実習: 5日間 校外実習: 50日間 合 計: 55日間	校内実習: 5日間 校外実習: 55日間 合 計: 60日間
中・高総日数	校内実習: 25日間 校外実習: 54日間 合 計: 79日間	校内実習: 23日間 校外実習: 61日間 合 計: 84日間

※主な変更点を太字網掛けにして示している。

Ⅴ まとめ(結果・課題・今後の展望)

教育課程の変更により、体験の機会を増やすことができた。その結果、①複数の業種(仕事内容)や働き方を体験することができ、生徒の職業イメージが膨らみやすくなった、②一般企業での実習には現時点では課題が大きいがチャレンジすることができる、などの点が挙げられる。

教育課程の変更前後の高等部産業現場等における実習について、前項図1の一般企業等の活用の推移にあるように、令和4年度から校外での実習期間を2期間にしたことにより、一般企業等での実習にチャレンジする生徒の割合が増加(20%前後→35%前後)したと考えられる。

また、以下図2は高等部1年生の一般企業活用率の推移をまとめたものである。年度によって入学する生徒の実態(前項表2)に違いはあるが、令和4年度入学生(本年度高等部2年生)については、活用率が40%を超えている。また、令和5年度入学生については1期間目だけのデータになるが、活用率が25%となっている。2期間目の現場実習でチャレンジすることを計画している生徒もいるため活用率の上昇が見込まれる。さらに、グループホームの体験利用と合わせた実習も計画しやすくなり、生活面の課題も把握しやすくなった。

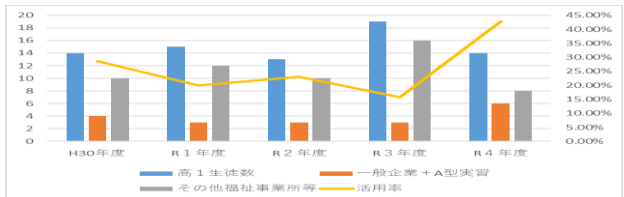


図2 高等部1年次の現場実習における

一般企業(就労継続支援A型含む)活用率の推移

中学部のジョブチャレンジについても、ジョブチャレンジの記録様式を見直し、高等部へ進学した場合に活用できるようにした。

教育課程の見直しを行い、現場実習を実施したのはまだ昨年度の1年間のみ(本年度2年目)である。今後も①現場実習先の選定の視点、②実習回数、③引継ぎ資料・進路指導及び記録、以上3点の改善の結果がどのようになるかまとめていきたい。そして、一般企業(就労継続支援A型含む)へ就労する生徒(希望する生徒)の割合が、どのように変化していくか検証できればと考えている。また、生徒の希望進路達成が大前提であることに留意しながら、よりよい進路指導を推進していきたいと考えている。

《引用・参考文献》

・大分県『長期教育計画「教育県大分」創造プラン2016』 2020改訂版

キャリア教育の視点や学部間・学校間の接続を踏まえた作業学習、進路学習

～コグトレの実践と小中連携事業等の取組を通して～

串間市立串間中学校 教諭 大岩本 毅

Keyword：コグトレ、小中・支援学校連携、職場体験学習、作業学習

I はじめに

1. 学校概要

本校は、宮崎県最南部に位置し、国の天然記念物に指定された御崎馬が暮らす都井岬を有する、串間市唯一の中学校である。平成29年4月に、市内6校の中学校を統合して開校し、本年度7年目を迎える。

本学級は令和4年度に、知的障がいの特別支援学級を1クラスとし、生徒5名（1年生男子1名、2年生男子1名、女子1名、3年生男子2名）、本年度は生徒5名（1年生男子2名、2年生男子1名、3年生男子1名、女子1名）が在籍している。キャリア教育については、週2時間の「生活単元学習」、交流学級での「学級活動」「総合的な学習の時間」における学習や行事などさまざまな活動を通して、「人間関係形成能力」、「情報活用能力」、「将来設計能力」、「意思決定能力」の育成を図りながら、自分自身で進路を選択し、決定できるように指導している。また、学校間の交流を通して、社会性を伸ばす目的で、年2回の小・中連携事業、支援学校との居住地校交流を行っている。

2. 生徒の実態

1年生男子2名と2年生男子1名は療育手帳（B-2）を所持している。3年生男子1名、女子1名は療育手帳を所持していない。（3年生男子1名は小学校2年生時に療育手帳B-2返納）。障がいの程度に個人差があるが、全体的に長期記憶や、通常の学級の生徒との関わりに苦手意識をもつ生徒が多い。

II 指導の実践

1. コグトレ



【写真1：コグトレに取り組む生徒】

本学級におけるコグトレ（Cognitive Training）の実践は、認知能力の向上、特に「覚える」、「見つける」、「想像する」ことを向上させる目的として実施した。1年生2名については、小学校の個別的教育支援計画の実態から「覚える」、「見つける」を重点的に実施し

ていく。2年生1名と3年生2名については、実態から「覚える」、「想像する」に重きをおいて実践していくことにした。コグトレの効果を理解するためには、短期的な効果だけでなく、長期的な成果を評価することも重要となるが、今年度は、1カ月おきに、同じ課題や同類の課題に取り組み、「解答に要した時間」を比較することで短期的な評価をしていくこととする。

2. 小中、支援学校連携事業



【写真2：市小中交流会】

串間市では年2回（7月、2月）、市内の小・中学校の特別支援学級に在籍する児童生徒の交流を深め、社会性を伸ばす目的で、交流会を実施している。

令和4年度はオンライン形式で実施し、今年度は対面での実施となった。交流会では、現中学校3年生2名が昨年度から司会と進行を務め、小学生にも分かりやすい会の内容を企画した。また、支援学校との居住地校交流会では年2回、中学校校区から支援学校へ通学する生徒とレクリエーション活動を通して、交流を深める事業も実施しており、支援学校の情報共有も可能となっている。

3. 職場体験学習

本校では、第2学年時に、生徒達に職業や社会との関わりを、実体験を通して理解し、将来の進路選択や職業意識の形成を支援する目的で、職業体験学習を実施している。本学級の生徒も交流学級の生徒と同様に2日間の体験学習に取り組んだ。

4. 生徒の主体性を高める作業学習



【写真3：イチゴの栽培】 【写真4：はんだ付け実習】

ここでは支援学校でも実施されている作業実習を中心に学習に取り組んだ。生徒の願いにも沿いながら、実態に合わせた学習内容として、栽培学習、ものづく

りの作業実習、調理実習を設定し、できたことへの評価を繰り返し行うようにした。

Ⅲ 結果

1. コグトレの結果

【表1：「覚える」の正解数】

「覚える」	6月	7月
1年Aくん	3問/10問	↑ 7問/10問
1年Bくん	7問/10問	↓ 2問/10問
2年Cくん	4問/10問	↑ 5問/10問
3年Dくん	2問/10問	↑ 5問/10問
3年Eさん	4問/10問	↑ 7問/10問

【表2：「見つける」の解答時間】

「見つける」	6月	7月
1年Aくん	5分56秒	↑ 3分25秒
1年Bくん	4分8秒	↑ 3分3秒
2年Cくん	2分36秒	↑ 1分53秒

【表3：「想像する」の正解数】

「想像する」	6月	7月
2年Cくん	11問/12問	↓ 9問/12問
3年Dくん	11問/12問	→ 11問/12問
3年Eさん	8問/12問	↑ 11問/12問

表2が示すように、「見つける」のトレーニングについては、トレーニングを繰り返すごとに、解答時間が短縮されており、成果が伺える。表1「覚える」と表3「想像する」については、解答結果及び誤答数に変化は見られず、特に「想像する」については、考えがまとまらず、解答に苦勞する姿が見られた。

2. 小中、支援学校連携事業



【写真5：居住地交流会】

本年度の交流会は対面で、小学生、中学生混合のグループで実施となった。中学生が各グループのリーダーを務め、小学生に各ゲーム内容の説明、獲得点数の計算、声掛けを積極的に行い、トラブルのないスムーズな会の運営に取り組んだ。また、令和4年度の支援学校との居住地校交流では、野球やボッチャなどのスポーツを通じての交流を実施した。ボッチャでは、最初は参加を渋っていた社会不安障がいをもつ生徒が、教室の外（廊下側）から途中参加したり、上手に投げ

令和4年度の交流会は、オンライン形式でZOOMラウンジをつかったゲームとジェスチャーゲームを中学生が企画し運営を行った。

られない支援学校の生徒を応援したりと、微笑ましい光景が多く見られた。2回目の野球では、初回と同様に、うまく打てない支援学校の生徒を励まし、途中でルールを変更するなど自分達で配慮していた。今年度も暑中見舞いの交換など交流が予定されている。

3. 職場体験学習



【写真6：職場体験学習中の生徒】

通常の学級の生徒と同様に2日間の体験学習に取り組んだ。特に、幼稚園を体験した生徒は、自分が卒園した園に派遣され、お世話になった先生や園児と触れ合い、苦

4. 生徒の主体性を高める作業学習



【写真7：調理実習中の生徒】

なものづくり実習や調理の実習活動を通して、仕事の内容を自分達で分担したり、複数で担当したりすることで、間違いを確実に見付けること、作業が早く進んだ生徒が、遅れている生徒をフォローすることなど、社会生活に必要な言動が多く見られるようになった。

Ⅳ 成果と課題

コグトレに取り組むことで、生徒個々の特性を具体的に知ることができ、教科の学習とも関連させた指導や学習活動が模索、提案できるようになった。また、各校種との交流や生徒のニーズに応じた作業学習を行うことで、社会生活に必要な「見通しをもって活動する」、「教師の指示に従う」、「一定時間作業に従事する」、「周囲と同じことをする」、「自分で考えて行動する」、「必要な情報を取り入れる」、「相手と調整する」、「必要に応じてコミュニケーションを取る」などのスキルの向上を図ることができた。今後も継続して取り組み、各教科の評価と参照しながら、長期的な評価として「立体図模写」「自画像」表現にも取り組ませていきたい。また、教育課程編成を含めた教科学習との関連や、個々に合わせた作業活動をさらに充実させる手だてを工夫していきたい。また、校内研修を充実させ、地域への理解・啓発活動の工夫も継続して行っていきたい。

《引用・参考文献》

- ・宮口幸治『コグトレみる・きく・想像するための認知機能強化トレーニング』,三輪書店, 2